

第1章 総合的な学習の時間のカリキュラム評価の進め方

1 カリキュラム評価の進め方

(1) カリキュラム評価の流れと評価項目の重点化

総合的な学習の時間は、他の教科等と異なって、この時間の目標・内容、評価の観点や評価規準の設定、単元開発など、この時間のカリキュラム作成については、各学校の独自性が求められている。このことは、各学校が、子どもや地域の実態などを踏まえた総合的な学習の時間のカリキュラムを作成し（計画カリキュラム）実践するだけでなく、実践された結果（実施カリキュラム）を基に、単元や評価規準、目標・内容等までを見直し、カリキュラムの改善を行い、毎年更新しながら学校独自のカリキュラムを創り上げていくことを意味している。

この時間のカリキュラムの見直し、改善の必要性は上述のとおりであるが、各学校においては、なかなか進んでいないのが現状である。その要因として、次の2つが考えられる。（カリキュラムの見直し、改善を図ることを「カリキュラム評価」とし、以下、カリキュラム評価と記す）

カリキュラム評価を行う際に検討する要素（評価の内容、評価の段階、評価の主体、評価の材料）が多岐にわたり（図1参照）、また、カリキュラムの実施前、実施中、実施後のすべての過程が点検の対象となるため評価が複雑になる。

単元実施の結果（実施カリキュラム）を評価し、単元計画や評価規準、目標・内容までを見直していくというような、評価をフィードバックさせていくことが必要である。しかし、それがうまく機能していくような評価体制をつくるのが難しい。

評価の内容	評価の段階	評価の主体	評価の材料
<ul style="list-style-type: none"> ・目標 ・育てたい資質や能力 ・年間カリキュラム、単元計画、本時単元計画 ・評価の観点 ・教科等との関連 ・家庭・地域との連携 ・指導体制 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間カリキュラム（実施前、実施中、実施後） ・単元計画（実施前、実施中、実施後） ・学習活動（実施前、実施中、実施後） など 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師 ・子ども ・保護者 ・地域の人 ・ゲストティーチャー など 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの記録（学習カード、自己評価カード、作品など） ・子どもの活動の姿（学習意欲・態度、課題意識など） ・教師の記録（観察、面談など） ・保護者、地域の人の意見や感想など

図1 カリキュラム評価を行う際に検討する要素

以上のことから、小・中学校研究委員会では、カリキュラム評価を構成する様々な要素を検討し、重点化を行うことで簡略化を図り、各学校が実践可能なカリキュラム評価の進め方について研究した。

カリキュラム評価に当たっては、この時間の目標や学習内容、単元構成等の段階ごとの検討を経て、図1のようなカリキュラム評価の要素（評価の内容・評価の段階・評価の主体・評価の材料）を基に、どの時期に、どのような方法で行っていくかを職員間で共通理解を図ることが大切である。例えば、評価の内容の「育てたい資質や能力」を検討する場合、「子どもにどれだけの力を身に付けさせることができたか」や「求める資質や能力は適切な設定であったか」などの点から見直す必要がある。そして、そのことを「単元の実施中に評価していくのか」「実施後に評価していくのか」、評価の段階を考慮する。その際、評価の主体は「教師」「子ども」などいろいろな場合が考えられる。さらに、「子どもの自己評価カード」「保護者のアンケート」など、

どのような評価材料を用いるかによって、カリキュラム評価の方法は多岐にわたる。

そこで、評価の段階に即してカリキュラム評価の要素を検討し、各学校が実践可能なカリキュラム評価の進め方を提案している。具体的には、前述のカリキュラム評価の基本的な考え方（P D S I）を基にして、図2のように【視点1：実施前】【視点2：実施中】【視点3：実施後】【視点4：カリキュラム全体】の4つの視点を時系列的に設けた。【視点4】を円の中央に配置したのは、目標・内容の作成から単元の実施まで整合性を図りながらカリキュラムを作成しているため、【視点1～3】と【視点4】を常に関連を図りながら評価を行っていく必要があるからである。さらに、各視点では、重点的に取り上げるべき評価項目を洗い出し、カリキュラム評価の精選を図っている。

前年度のカリキュラム評価を基に、本年度のカリキュラムを計画し、実践の中で修正を行いながら実施カリキュラムを残し、カリキュラム全体の改善をして、次年度に向けての引継ぎを行い、毎年更新していくことが望まれる。そうすることで、学校の総合的な学習の時間の確立ができると思う。

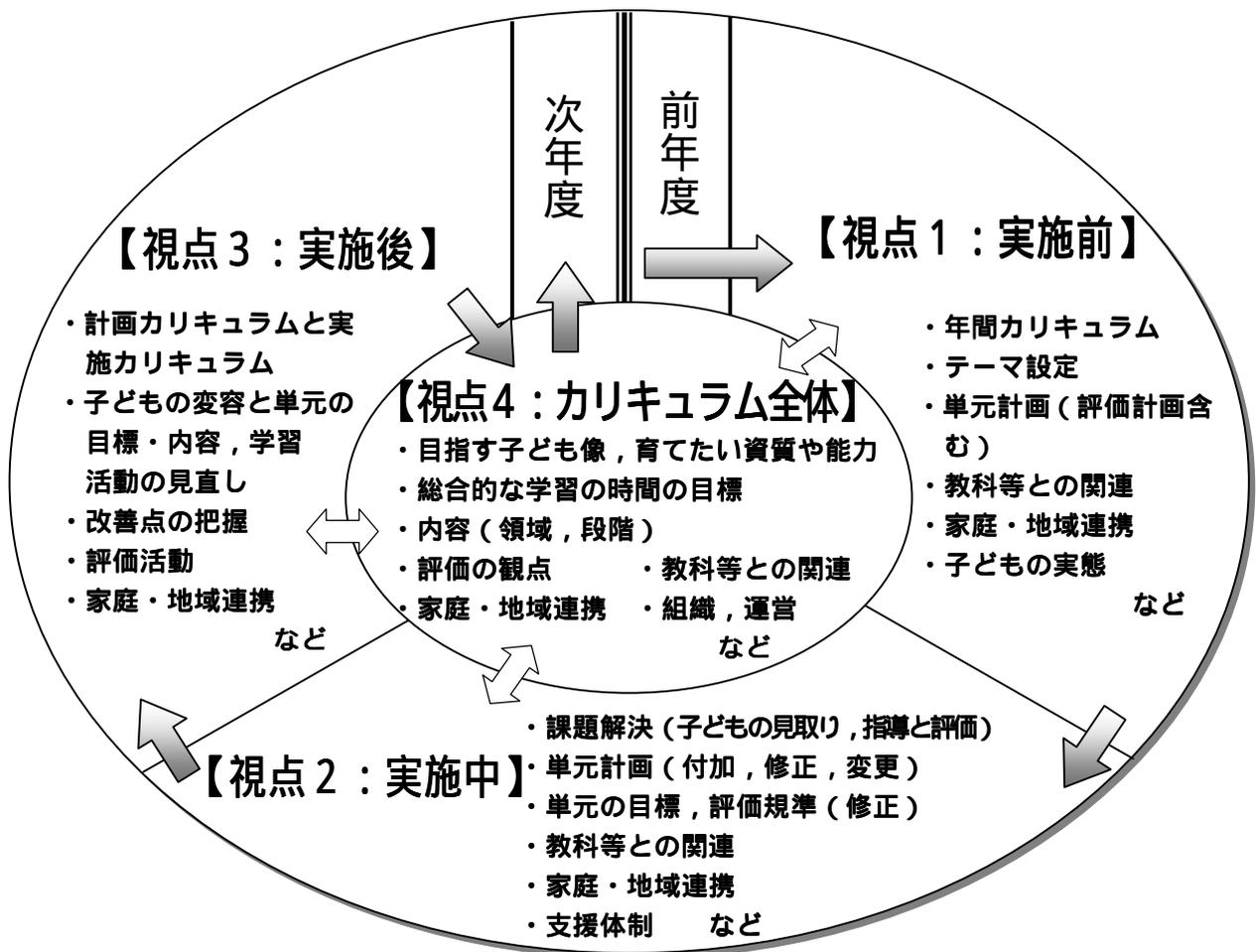


図2 カリキュラム評価の進め方

【視点1～3】におけるカリキュラム評価を行った後、【視点4：カリキュラム全体】の見直し・改善を行い、次年度への引継ぎ資料を残していくという流れで、毎年更新していくことになる。さらに、この時間の目標・内容や育てたい資質や能力などを作成しているため、【視点1～3】の段階では、【視点4】と関連を図りながらカリキュラム評価を行なうことが重要である。

なお、本研究におけるカリキュラム評価は、学校の教育課程（カリキュラム）すべてを含むものではなく、総合的な学習の時間のカリキュラム（目標・内容、年間指導計画、単元、授業など）と限定する。また、小・中学校研究委員会では、この時間の実施状況を考慮し、年間指導計画や単元計画の見直し・改善を図るとともに、その根拠となる授業までを視野に置き、カリキュラム評価を進めていく。

(2) 総合的な学習の時間の目標・内容から、単元の評価規準まで

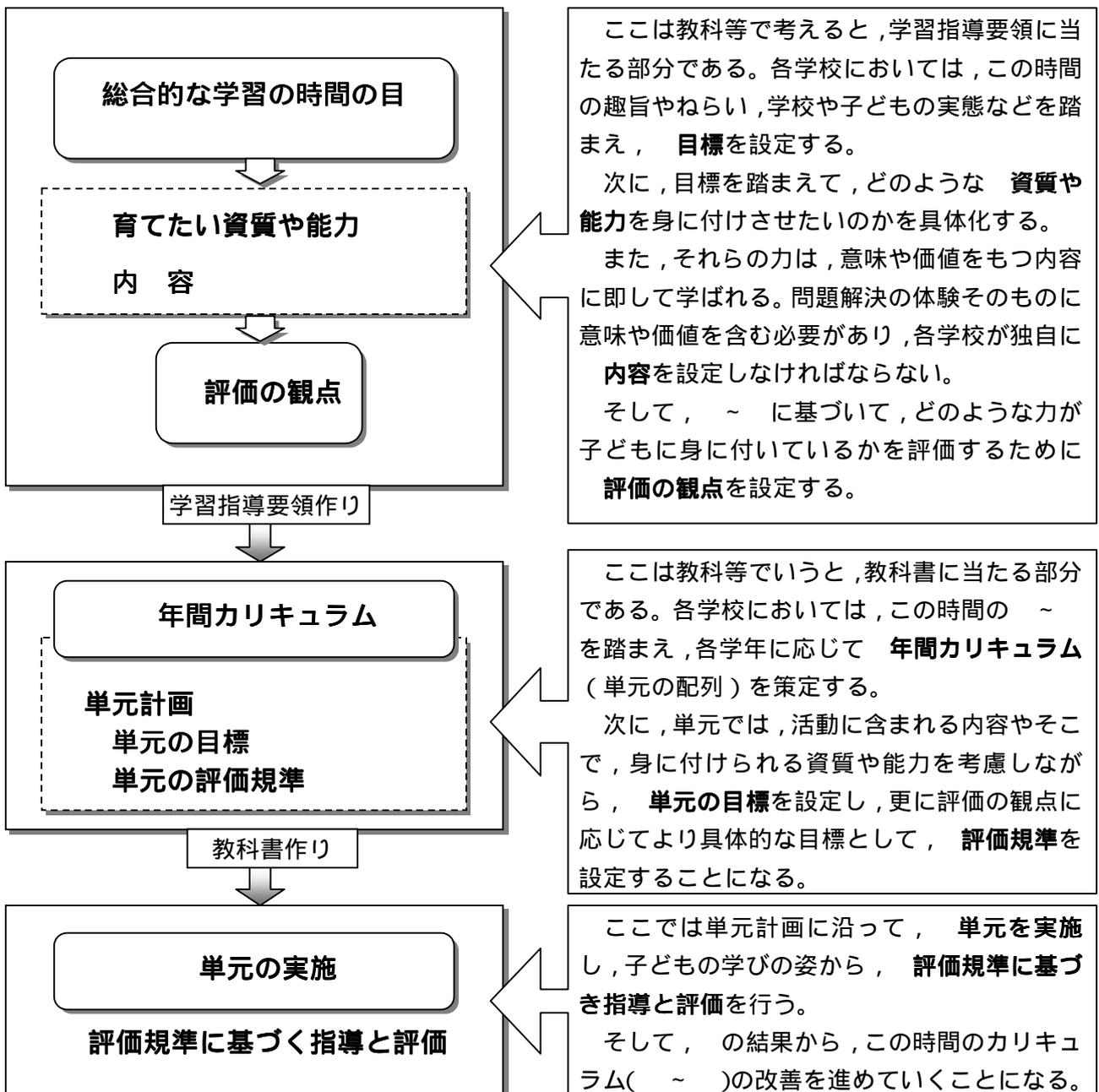
ア この時間の目標・内容から単元の実施までの整合性

カリキュラム評価の考え方については、前述のとおり【視点4：カリキュラム全体】と【視点1】、【視点2】、【視点3】との関連を踏まえなければならない。つまり、学校が設定したこの時間の目標・内容から、単元の実施までの整合性が必要となってくる。

また、カリキュラム評価については、次の2点からとらえていくことが大切である。

各学校で総合的な学習の時間の目標や内容を定め、計画したカリキュラム（年間カリキュラムや単元、学習活動等）が、子どもの学びにとってどれだけ有効であったかを評価すること。各学校で実施したカリキュラム（年間カリキュラムに基づいた単元や学習活動等）で、計画段階で定めた育てたい資質や能力がどの程度、身に付いたかを評価すること。

以上のことから、まず、この時間の目標・内容から単元の評価規準設定、単元の実施までの流れ（総合的な学習の時間のカリキュラム）について述べていく。



資料1 目標から単元の評価規準までの整合性を示すモデル

p7 資料2を参照

地域や生活に根ざした問題の中から，自らの課題を発見し，解決を図っていく中で，地域や自分のよさに気づき，自己の生き方を考える子どもを育てる

<内 容>

<育てたい資質や能力>

- ・ 自ら課題を見付ける力
- ・ よりよく課題を解決する力
- ・ 情報を処理，活用する力
- ・ 自己の生き方を考える力

(環境)体験活動を通して，自然のすばらしさにふれるとともに，身近にいろいろな環境問題があること，自分たちの生活の仕方とかかわりがあることに気づき，環境問題の解決やよりよい環境創造について考え，自分にできる方法で実践しようとする。

(情報)様々なメディアに触れ，慣れ親しむ中で，メディアの特性や機能を知るとともに，ネットワーク社会の一員として必要な資質や能力を身に付けようとする。 など

<評価の観点>

- ・ 問題解決力
- ・ 総合的な判断力
- ・ 情報活用力
- ・ 自己の生き方

第 学 年 < 年 間 指 導 計 画 >

p8 資料3を参照

<単元> 「 川に，ホタルを飛ばそう! 」(環境)

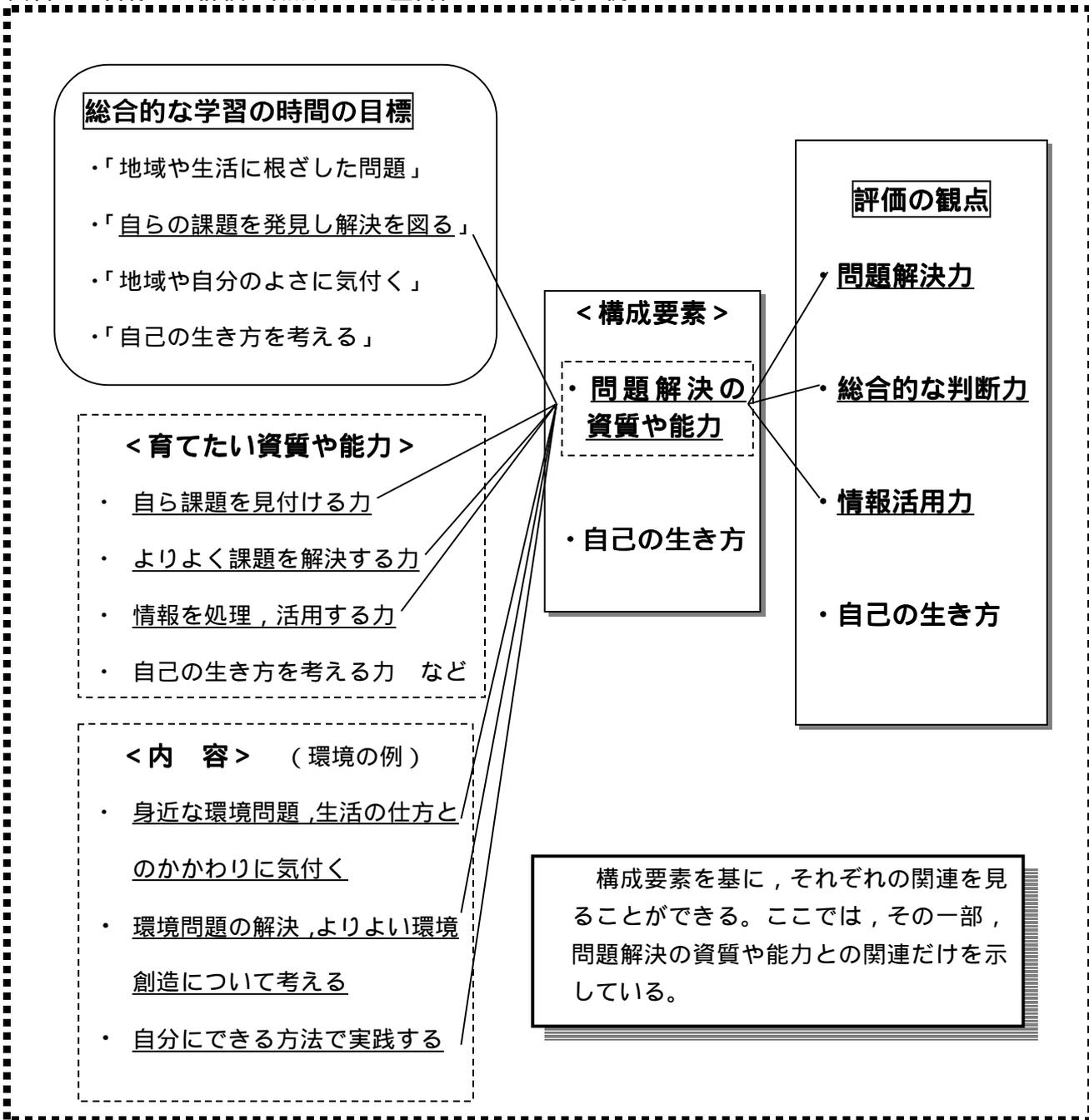
<目標> 身近な地域の環境に関心を持ち， 川を取り巻く問題点に気づき，自分たちの生活とのかかわりについて考えるとともに，自分にできる方法で水環境の改善に向けて実践しようとする。

<単元の評価規準>

- ・ 川の水の汚れに気づき，ホタルの飛び交う川にもどすために，自分の課題を見だし，生活環境との関連について調べたり，環境保全のために地域に働き掛けたりして，見通しをもって解決・追究している。 (問題解決力)
- ・ ホタルの生態やすみかを調べたり，専門家の話を聞いたりすることを通して，ホタルと自分たちの生活とのかかわりや環境を守ることの大切さについて考えることができる。ホタルを飛ばす活動を通して，環境について様々な考え方やとらえ方があはることに気づき，自分の生活や環境についての考えをもつことができる。 (総合的な判断力)
- ・ インターネットや環境センターを活用したり，地域の人とかかわったりしながら，望ましい水環境の在り方について調べることができる。調べたこと， 川に対する自分の思いを，ホームページやホタルの集いで分かりやすく発表することができる。 (情報活用力)
- ・ 水環境の改善にかかわる学習を通して，自己の活動を振り返り，地域とのかかわりや生活について考えることを通して，自分の考え方が変容してきたことに気づくことができる。 (自己の生き方)

次に、左の資料1を基に、目標・内容から評価規準までの整合性について具体的に述べる。この時間のカリキュラム評価を行う上で、カリキュラム全体を通して整合性があることが前提となってくるからである。また、カリキュラムの整合性のとらえ方については、この時間の重要な構成要素(「問題解決の資質や能力」「自己の生き方」との関連で見ていく。

資料2 目標から評価の観点までの整合性のとらえ方の例

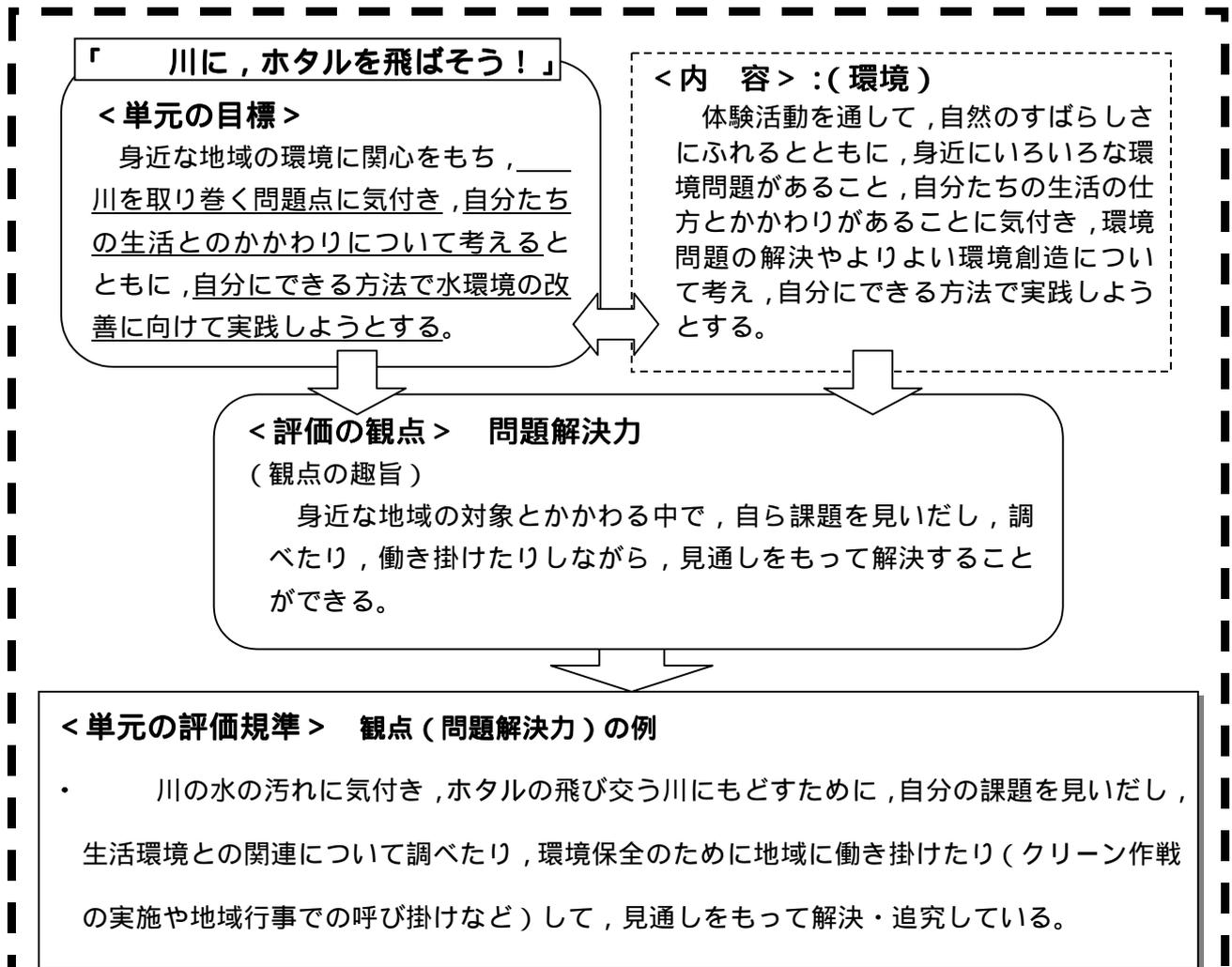


目標の「自らの課題を発見し解決を図る」ことは、問題解決の資質や能力を身に付けさせることであり、それを具体的に表したのが、育てたい資質や能力の「自ら課題を見付ける力」「よりよく課題を解決する力」「情報を処理、活用する力」である。また、それらの力は、学校が設定した環境という内容に即して学ばれることになる。つまり、「身近な環境問題、生活の仕方とのかかわりに気付く」「環境問題の解決、よりよい環境創造について考える」「自分にできる方法で実践」していく中で、それらの力を身に付けていくことができる。また、そういった力を、「問題解決力」「総合的な判断力」「情報活用力」という学校で設定した観点に合わせて、評価していくことになる。また、評価の観点については、子どもの

どのような力を評価していくのかをはっきりさせるために、評価の観点の趣旨を明確にしたり（資料3を参照）、授業で使えるように具体化したりする（資料4を参照）ことが重要である。

下の資料3では、単元の目標から評価規準までの整合性について説明している。まず、単元の目標についてであるが、例示している「川に、ホテルを飛ばそう！」という単元は、内容として環境との関係が深いので、それを踏まえて作成していくことになる。そして、単元の目標を、評価の観点を通して具体化したものが評価規準である。

資料3 単元の目標から評価規準までの整合性



さらに、評価の観点は、次のように授業で機能する程度に具体化しておくことが望まれる。そうすることで、職員間の共通理解が図られることにもなる。

資料4 評価の観点の具体化の例

問題解決力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 追究の見通しがもてる課題を設定することができる。 ・ 課題を追究するために、適切な方法(調査、観察、見学、実験など)で調べることができる。 ・ 課題追究の進捗状況を把握し、課題や計画などの修正を図ることができる。
総合的な判断力	<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を追究していく中で、いろいろな考えがあることに気付き、自分なりの考えをもつことができる。 ・ 課題の解決を図るために、有効な解決策を考えることができる。 ・ 課題解決のために収集した情報を、適切に処理し、効果的に活用できる。

イ 評価規準の活動案への位置付け（伊万里市立大坪小学校の実践から）

単元の評価規準を基に、評価場面に合わせ、更に具体化していく作業が必要になってくる。そこでは、目標の実現状況を子どもの学びの姿からとらえていくことになる。下の資料は、その具体例である。

単元名：「今、自分にできること」 - 地域の人とのふれあいの中で - （第5学年）

評価の観点	単元の評価規準（抜粋）
問題解決力	地域の人とふれあう活動を通して、自分たちが地域に役立つ場がたくさんあることに気づき、ボランティアに対する関心を深め、自分にできる活動に取り組むことができる。
学び方・ものの考え方	ボランティア活動に関する情報をインターネットや専門家から収集し、自分が取り組もうとする活動に生かしたり、その成果を分かりやすく表現したりすることができる。
学習への主体的・創造的態度	ボランティア活動に取り組む人の考え方、生き方にふれ、進んで取り組もうとする。ボランティア活動の体験を生かし、自分にできることを考えようとする。
自己の生き方	ボランティア活動をする人の様々な考え方や活動を理解し、自分の活動に生かそうとする。ボランティア活動に取り組む中で、自分の考えが変容していることに気付くことができる。

単元計画（39時間、評価の観点の番号は上と同じ） 本時の活動案

過程	学習活動	評価の観点	本時のねらい							
ふれる	1 ボランティア活動って何だろう。 (1)グループごとに、ボランティア体験をする。 (2)報告会で課題を出し合って、計画を立てる。		<ul style="list-style-type: none"> よりよいボランティア活動をするために互いにアドバイスをを行う。（学び方・ものの考え方） 友達や地域の人と進んでかかわりながら、情報を交換し、互いの活動に生かそうとする。（学習への主体的・創造的態度） 							
			<table border="1"> <thead> <tr> <th>学習活動</th> <th>評価の観点と評価規準</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1 学習活動の確かめる。</td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">これからのボランティア活動に生かすために、互いにアドバイスをしよう！</td> </tr> <tr> <td>2 各グループに分かれて、交流を行う。 A：指導者の支援を受けながら自分のボランティア活動を練り直す。 B：ボランティア活動で生じた課題を基に、地域の人と交流し、計画を修正・改善する。 C：課題について互いにアイデアを出し合い、計画を修正・改善する。 D：自分たちの力で、更によい取組を考える。</td> <td>友達や地域の人と進んでかかわり、自分の活動に生かすためのアドバイスを得て、自分の考えを積極的に出そうとしているか。（A、B、Cのグループ） よりよいボランティア活動に高めるために、アドバイスを提示したり、互いのよさを認め合ったりしているか。（Dのグループ）</td> </tr> <tr> <td>3 活動を振り返り、交流で得た情報を整理し、計画を見直す。</td> <td>交流で得た情報を自分の取組に生かそうとしているか。</td> </tr> </tbody> </table>	学習活動	評価の観点と評価規準	1 学習活動の確かめる。		これからのボランティア活動に生かすために、互いにアドバイスをしよう！		2 各グループに分かれて、交流を行う。 A：指導者の支援を受けながら自分のボランティア活動を練り直す。 B：ボランティア活動で生じた課題を基に、地域の人と交流し、計画を修正・改善する。 C：課題について互いにアイデアを出し合い、計画を修正・改善する。 D：自分たちの力で、更によい取組を考える。
学習活動	評価の観点と評価規準									
1 学習活動の確かめる。										
これからのボランティア活動に生かすために、互いにアドバイスをしよう！										
2 各グループに分かれて、交流を行う。 A：指導者の支援を受けながら自分のボランティア活動を練り直す。 B：ボランティア活動で生じた課題を基に、地域の人と交流し、計画を修正・改善する。 C：課題について互いにアイデアを出し合い、計画を修正・改善する。 D：自分たちの力で、更によい取組を考える。	友達や地域の人と進んでかかわり、自分の活動に生かすためのアドバイスを得て、自分の考えを積極的に出そうとしているか。（A、B、Cのグループ） よりよいボランティア活動に高めるために、アドバイスを提示したり、互いのよさを認め合ったりしているか。（Dのグループ）									
3 活動を振り返り、交流で得た情報を整理し、計画を見直す。	交流で得た情報を自分の取組に生かそうとしているか。									
つかむ	2 ボランティア活動について考えよう。 (1)課題解決に向けての情報を得るためにボランティアコーディネーターと交流する。 (2)学習を振り返り、自分にできるボランティア活動を考える。									
深める	3 自分にもできるボランティア活動を実践してみよう。 (1)ボランティア活動に必要な知識や技能を身に付けたり、情報を集めたりして活動を行う。 (2)交流会へ向けた準備を行う。 (3)今のボランティア活動をよりよい活動にするために友達や地域の人と情報交換する。 (4)ボランティア活動を行う。									
広げる	4 今までのボランティア活動をまとめ、これからのボランティア活動について考える。									

実際の授業においては、評価場面に合わせて、単元の評価規準を更に具体化し、子どもの学びの姿をとらえていくことになる。そこで得た評価情報を基に、総合的な学習の時間のカリキュラムの見直し・改善を図っていく。

2 カリキュラム評価の4つの視点と重点項目

(1) カリキュラム評価【視点1：実施前】の考え方

年度初めのこの段階は、新しい学年の担任が、子どもの学びの履歴や興味・関心、教師の思いなどをもとに総合的な学習の時間を計画する。その際、【視点4：カリキュラム全体】との関連を踏まえながら、学年のテーマや年間カリキュラム、単元や評価計画などを策定していくことになる。実施前のこの段階では、前年度のカリキュラムを評価しながら、年間指導計画を中心に今年度のカリキュラムを作成していくことが重要である。

【視点1：実施前】では、昨年度の記録や本年度の子どもの実態などを基に計画を練ることが中心となり、カリキュラム評価の項目として、「年間カリキュラム」「テーマ設定」「単元計画」の3つが重要であると考えた。総合的な学習の時間の学習活動は、基本的にテーマ（課題）中心である。例えば、「ホテルの飛び交う川にしよう（環境）」「みんなにやさしい町づくり（地域・福祉）」といった、テーマ（課題）を中心に、単元計画（評価計画）を考え、それをつなげていったものが年間カリキュラムとなる。その他の評価項目としては、「教科等との関連」や「家庭・地域連携」などが考えられる。

カリキュラム評価の実際については、下の資料5を参考にしながら、各学校において項目やチェック事項を設定し、研究推進委員会や学年会などで共通理解を図りながら、本年度のカリキュラムを策定していくことになる。

資料5 カリキュラム評価の【視点1：実施前】の項目とそのチェック事項

項目	チェック事項
年間カリキュラム	前年度のカリキュラムと子どもの実態（身に付けている学び方、学習経験）等を考慮しているか。 ----- 単元の配列、実施の時期や期間が適切であるか。 ----- 発達段階に応じた育てたい資質や能力、学ばせたい学習内容等を考慮しているか。 ----- テーマをつかむ期間や体験活動を十分に保障しているか。
テーマ設定	自校の総合的な学習の時間の目標を踏まえているか。 ----- 子どもの発達段階、学習経験、興味・関心（願いや思い）等を踏まえたテーマ設定になっているか。 ----- 追究していく価値や意義をもったテーマであるか。
単元計画（評価計画）	課題をつかむ期間（体験活動）を十分にとっているか。 ----- 子どもの特性や地域の特性を生かした単元計画となっているか。 ----- 子どもの意識の流れに沿った単元計画となっているか。 ----- 評価の観点や評価規準等について職員間で共通理解を図っているか。 ----- 目標・内容を踏まえた、具体的な評価規準が設定されているか（子どもの伸び、よさを評価できるか）。
4 教科等との関連	各教科等との関連が図られているか（年間指導計画で相互の関連を明示する）。 ----- 総合的な学習の時間と各教科等との共通点や相違点等の共通理解が図られているか。
5 家庭・地域連携	地域の教育力の活用を図っているか（人材、施設等）。 ----- 地域の諸行事との連携が図られているか。 ----- 家庭・地域への協力要請に向け、学校側の趣旨説明ができているか。
6 子どもの実態	本年度の子どもの学習履歴、学び方の習得状況、興味・関心等を把握しているか。

「テーマ設定」において、カリキュラム評価を行った例である（資料6）。中学年は「地域の現在を知る」、高学年は「地域の未来をデザインする」というようにテーマの系統性が図られている。

(2) カリキュラム評価【視点2：実施中】の考え方

【視点2：実施中】の段階は，単元計画に沿って子どもの学習活動が展開される。この段階のカリキュラム評価は，子どもの学びを評価する学習評価が中心となる。本時の目標や評価規準を基に，子どもの姿を見取りながら，目標や評価規準の実現状況を評価していく。そして，その評価結果を基に，次時の計画（展開や手立てなど）の見直しを図っていくことになる。そこで，この段階のカリキュラム評価の重点項目として，「課題解決」「単元計画」「単元の目標，評価規準」の3つを考えた。その際，【視点4：カリキュラム全体】との関連を踏まえながら，単元の目標や内容，評価規準の実現状況をとらえていくことが重要である。また，その他の評価項目としては，「家庭・地域連携」や「支援体制」などが考えられる。

カリキュラム評価の実際については，【視点1】と同様に下の資料を参考にしながら，各学校において項目やチェック事項を設定し，職員間で共通理解を図りながら実践していくことになる。

資料8 カリキュラム評価の【視点2：実施中】の項目とそのチェック事項の例

項目	チェック事項
課題解決（子どもの見取り，指導と評価）	子どもの興味・関心，疑問等に基づいた課題となっているか。 子どもが，課題を追究していくことの意義（価値）を理解しているか。 課題を見いだせない子どもに対して，有効な支援を行っているか。 課題をつかませるために，子どもに体験活動や話し合う場を十分に保障しているか。 課題解決についての，具体的な見通しを子どもがもっているか。 子どもの学びの姿を多面的，継続的にとらえ，適切な指導を行っているか（指導と評価の一体化）。 子どもの伸び・よさを継続的に把握することができているか（ポートフォリオ）。
単元計画（付加，修正，変更）	子どもの意識の流れに沿った単元計画となっているか。 課題をつかむ期間や手立て（体験活動や話し合い）を十分に保障しているか。 子どもの特性や地域の特性を生かした単元計画となっているか。 課題や活動の変更について，対応できる支援体制，相談体制ができているか。
単元の目標，評価規準（修正）	自校の総合的な学習の時間の目標や内容等が，単元に合わせ，より具体的になった評価規準が設定できているか。 子どもの学びの姿の変容，活動の変更等に応じて，単元の目標，評価規準の見直し（更新）が図られているか。
4 家庭・地域連携	保護者や地域の人々へ協力を依頼するに当たって，十分な説明，打合せができているか。 地域での活動に際し，マナーや安全面について適切な指導を行っているか。
5 支援体制	活動内容に合うような学習形態をとっているか。 情報，通信機器や学校図書館が活用できる状態か。

「課題解決」について，カリキュラム評価を行っていくためには，「単元の目標，評価規準」との関連を図らなければならない。単元の目標を，評価の観点ごとに具体化した評価規準を設定し，さらに，毎時の活動に合わせ具体化していくことが必要である。そして，子ども一人一人が，自らの思いや願いの実現に向けて課題解決に取り組んでいる過程を，評価規準に基づいて子どもの学びの事実を評価し，適切な指導を行う。それを繰り返しながら，子どもにどのような力が付いたのか，目標

の実現状況をとらえていくことになる。資料9は、評価規準が子どもの姿を見取るのに適切であったかどうかの見直しを行った例である。単元の目標・内容の見直しについても、検討することが必要である。

資料9 単元の評価規準の見直しの例

単元 「わたしたちの 川を守ろう！」(環境)

評価規準

川的环境から自分の課題を見だし、よりよい自然環境づくりに向け、自分にできる方法を考え見直しをもって追究できる。これらの学習を通して、自分の生活と川的环境とのかかわりについて考える。(思考・判断)

↓

<評価規準を基にして子どもの学びの事実をとらえる>

【子どもの学びの事実】

- ・ 川的环境悪化の原因(生活排水、ごみの不法投棄など)に気付いている。
- ・ 調査活動や清掃活動を通して、生き物が少なくなったり、水が汚くなったりしてきていることに気づき、このままでは川的环境が改善されないことに危機感を感じている。
- ・ 川的环境保全の取組、協力を地域の人に訴えたいと切実に思っている。

など

↓

<評価規準の見直し、妥当性を検討>(下線部を付加修正している)

見直した評価規準

川的环境から自分の課題を見だし、よりよい自然環境づくりに向け、自分にできる方法を考え見直しをもって追究できる。これらの学習を通して、これからの川的环境保全の在り方と自分を含めた地域のかかわり方について考えることができる。

評価規準に基づいて、子どもの学びの姿を評価する場合、適切な評価場面を意図的、計画的に設定しておくことが重要である。学習過程に沿って、下の資料10のような場面が想定できる。さらに、子どもの評価を基に、子どもの問題意識をとらえ、それに応じて、単元計画を修正していくことも必要になってくる。

資料10 評価場面の設定と評価規準の例

課題をつかませるための共通体験の場面(どのような気付きをもつことができか)
自分なりの学習課題を決める場面(共通のテーマに迫ることができる課題か)
追究場面での対象のふれあいの場面(気付きや思いに深まりが見られるか)
話合いの中で自分の課題を見直す場面(共通のテーマに迫ることができる課題か)
課題追究のための見直しをもたせる場面(適切な調査、探究方法を選択しているか)
活動計画に沿って追究していく場面(調査、取材などに意欲的に取り組んでいるか)
追究したことをまとめる場面(グラフ・表などの効果的な方法で表現しているか)
学習を振り返る場面(自分のよさや伸びをとらえることができているか)

具体的な評価場面と評価規準を、資料10のようにあらかじめ設定しておくことが必要である。そして、そこでの評価を基に、保護者への説明責任として、「このような資質や能力が身に付いています」と一人一人の子どもに即して確実に示していくことが重要である。

(3) カリキュラム評価【視点3：実施後】

【視点3】単元実施後の段階は、計画カリキュラムを修正しながら、実践の結果として残った実施カリキュラムを基に反省し、改善点を明らかにしていくことが中心となる。学年のテーマや課題、学習活動などが適切であったのか、単元を通して子どもが内容を獲得することで培った資質や能力はどのようなものであったかなどについて見直し、改善点を明らかにして次年度への引継ぎ資料として残すことになる。

そこで、この段階のカリキュラム評価の重点項目として、「計画カリキュラムと実施カリキュラム」「子どもの変容と単元の目標・内容」「改善点の把握」の3つを考えた。この段階でも、【視点4：カリキュラム全体】との関連を踏まえることが重要である。

資料11 カリキュラム評価の【視点3：実施後】の項目とそのチェック事項

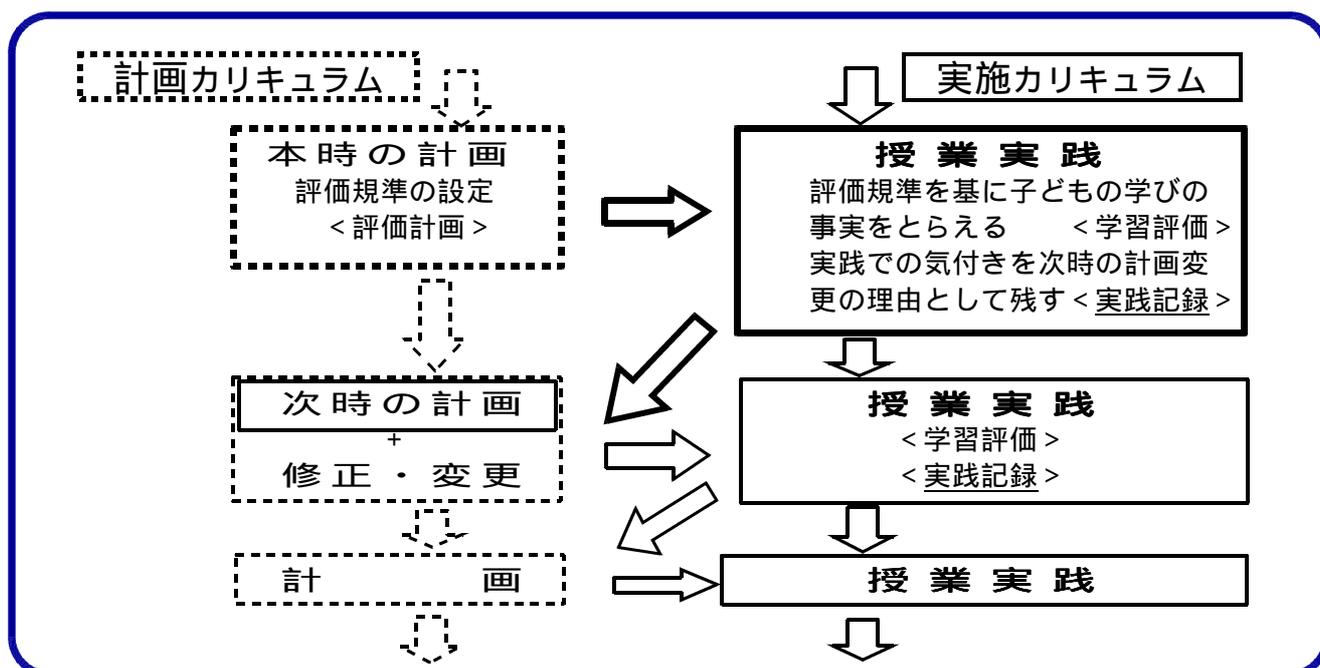
項目	チェック事項
計画カリキュラムと実施カリキュラム (次年度へ引継ぎ)	授業実践(子どもの課題意識, 興味・関心, 学び等)に基づき, 計画カリキュラムがどのように修正・改善されたか, その根拠を明らかにすることができたか。 ----- 次年度への示唆として, 気付き(効果的な手立て, 地域連携の成果等)や検討事項(活動の種類, 時間数, 支援体制)等が引継ぎ事項として残されているか。
子どもの変容と単元の目標・内容	子どもが「自らの生き方を考える」総合的な学習の時間であったか(授業評価)。 ----- 単元を通して, 子どもが内容を獲得することで培った資質や能力を把握し, 自校の総合的な学習の時間の内容の見直しを図ったか。
改善点の把握	テーマや課題, 学習活動は, 育てたい資質や能力を高めるものであったか。 ----- 総合的な学習の時間のカリキュラムについて, いつ, どのように改善するのか明確にしたか。
4 評価活動	評価の観点は適切であったか。活用できたか。 ----- 評価規準を指導に生かすことができたか。 ----- 評価情報のフィードバックが有効に機能していたか。 ----- 子どものポートフォリオが, 自己の伸びを自覚させることに機能していたか。
5 家庭・地域連携	家庭・地域連携における改善点を明らかにしているか。 ----- 家庭・地域に対して自校の教育活動(総合的な学習の時間を含む)の説明責任がなされているか。 ----- 家庭・地域の声や要望等を大切にしているか。 ----- 協力を依頼できる人材, 施設を校内資料に残しているか。

この段階でのカリキュラム評価の項目は、【視点1】や【視点2】で行った評価が基になるので、重なるものが多いが、修正されて残った実施カリキュラムとして、次年度のカリキュラム作成につなげていく意味で大変重要である。学期末に、カリキュラム検討会等を開き、職員間での共通理解を図りながら、学校全体でよりよい総合的な学習の時間のカリキュラムを作成していくという視点で取り組んでいくことがのぞまれる。

資料11の「計画カリキュラムと実施カリキュラム」について、具体的な手続きについて述べる。計画カリキュラムに沿って本時の授業を行い、評価規準を基に子どもたちの学習評価をする。その結果を基に、次時の計画を検討する。その際、本時の手立ては有効であったか(変更が必要な場合はその意図や根拠)、どのような子どもの学びがあったのか(内容の獲得)、支援体制は十分であったかなど、気付き・変更の理由を残していくことが重要である。実施カリキュラムは、毎時間の結果(実

実践記録)として、次年度への資料として残していく。

資料12 計画カリキュラムと実施カリキュラムの考え方



「子どもの変容と単元の目標・内容」でのチェック項目に、「子どもが『自らの生き方を考える』総合的な学習の時間であったか(授業評価)」を挙げている。学習活動を展開していくに当たって、重要なことは、その活動が総合的な学習の時間として成立するのかどうかを見極めることである。テーマ(課題)中心に学習を進めていくことから、学年や学級、グループという集団での活動場面も多く、ややもすると他の教科等の活動とよく似たものになることがある。「子どもが主体的に活動している」とか、「体験的な活動をしている」とか、「問題解決的である」というだけではこの時間の学習であるとはいえない。教科や道徳、特別活動、学校行事と区別されるためには、「自己の生き方を考える」総合的な学習の時間としての授業評価が必要である。下の資料13は、佐賀市立開成小学校の「総合的な学習の時間の授業評価の視点」である。開成小学校の総合的な学習の時間の目標(「地域や生活に根ざした問題の中から課題を発見していく中で、地域や自らの『よさ』を自覚し、自らの生き方を考える子どもを育成する。’)などと関連させて設定されている。

資料13 「総合的な学習の時間の授業評価の視点」(成立条件)

<前提条件>

- ・ 子ども主体の活動であること
- ・ 課題中心であること
- ・ 体験を重視した問題解決的な活動であること

視点1「地域」

- ・ 活動が地域と深くかかわっているか

視点2「学び」

- ・ 活動が子どもの思いや願いに基づいているか
- ・ 活動が本校の総合的な学習の内容に則しているか
- ・ 子ども一人一人が課題を自分のものとして認識しているか
- ・ 活動の中で、子ども同士の学び合いが行われているか
- ・ 子ども一人一人が学んだことを実感し、そのことを自分の言葉で述べるができるか

視点3「生き方」

- ・ 子ども一人一人が活動を通して自己の成長を自覚しているか
- ・ 子ども一人一人が自己を振り返り、生活がよりよい方向に変化しているか

平成13年度佐賀市立開成小学校研究紀要より

(4) カリキュラム評価【視点4：カリキュラム全体】の考え方

【視点4】は、総合的な学習の時間のカリキュラム全体にかかわる視点であり、学校の総合的な学習の時間の目標・内容、指導体制など、基盤となるものを評価していく。この視点でのカリキュラム評価は、主に単元が終わった学年末から、次年度の初めにわたって行われるものである。この時間のカリキュラムは、毎年見直し・改善を図っていくことが求められており、その年度の成果や課題を次年度へ引き継ぐことと、自校の総合的な学習の時間のカリキュラムという基盤を見直すという意味で、大変重要な視点である。

【視点4：カリキュラム全体】での、カリキュラム評価の重点項目として、「目指す子ども像、育てたい資質や能力」「総合的な学習の時間の目標」「総合的な学習の時間の内容」の3つを考えた。その他の評価項目としては、「評価の観点」や「教科等との関連」「組織、運営」などが考えられる。カリキュラム評価の実際については、職員間で共通理解を図りながら実践していくことになる。

資料14 カリキュラム評価の【視点4：カリキュラム全体】の項目とそのチェック事項

項目	チェック事項
目指す子ども像、育てたい資質や能力	子どもの学び（獲得した力）を分析し、目指す子ども像や育てたい資質や能力が設定されているか（見直しが図られているか）。 目指す子ども像、育てたい資質や能力、総合的な学習の時間の目標との整合性が図られているか。
総合的な学習の時間の目標	子どもの学び（獲得した力）に応じて、総合的な学習の時間の目標の見直しが図られているか。 総合的な学習の時間の目標の共通理解が図られているか。
総合的な学習の時間の内容	子どもの学びの成果（獲得した力）を基に、内容（領域、段階）の検討・見直し（付加修正）が図られているか。 総合的な学習の時間の目標が、内容に具体的に反映されているか。
4 評価の観点	評価の観点が具体化され、子どもの学びを多面的に評価するために活用することができるか（観点の共通理解が図られているか）。
5 教科等との関連	知の総合化が図れているか（各教科等 総合的な学習の時間）。 子どもの主体的な活動（意識の流れ）に合わせて、無理なく教科等との関連を図ることができるか。
6 家庭・地域連携	家庭・地域に対して自校の教育活動（総合的な学習の時間を含む）の説明責任がなされているか。 他校との情報交換、小・中・高の連携を図っているか。
7 組織、運営	総合的な学習の時間の趣旨やねらいを理解しているか。 自校の特色ある総合的な学習の時間の方向性を把握しているか。 目標・内容、評価の観点、各学年の取組等について、共通理解、情報交換が図れる体制になっているか（機能しているか）。 教師間（学年、TT等）で、授業の進め方について情報交換や共通理解が図られているか。

「総合的な学習の時間の目標」でのチェック項目に、「総合的な学習の時間の目標の共通理解が図られているか」を挙げている。年度初めに、この時間の目標を受けて、各学年の総合的な学習の時間のテーマや目標を設定する。目標の共通理解が図られているか、また、目標の構成要素での整合性を検討することが求められる。次ページの資料15を見てみると、学校の目標の構成要素は、「地域や生活に根ざした問題からの課題解決学習」、「課題解決の過程で『よさ』を自覚する」、「自らの生き方を考える子どもを育成する」となっている。学校の目標に含まれるこの3つの要素で、各学年の目標が成り立っているかどうか見ていくことが大切である。さらに、年度末に、子どもの学びの事実を基に、学年の目標に近付くことができたかどうかを評価していかなければならない。

資料15 学校の目標と学年の目標 (波線部は、「自らの生き方を考える」との関連が見られるところ)

<p>総合的な学習の時間の目標</p> <p>地域や生活に根ざした問題の中から課題を発見し解決していく中で、地域や自らの「よさ」を自覚し、<u>自らの生き方を考える子どもを育成</u>する。</p> <p>学校の目標と各学年の目標に整合性が見られるか</p>	学年テーマと目標		
	3年	「大好き!開成 がばい遊べる町にしよう」 ～めざせ『遊び』の達人～	開成の自然やものを生かした遊びづくりを通して、創造することや学び合うことの楽しさや難しさを感じながら開成の町のよさを知り、 <u>地域の自然・もの・人に積極的にかかわろうとする。</u>
	4年	「開成の人とこだわりを伝え合おう」	自分たちのこだわりを追究したり、地域に働く人々のこだわりを知ったり、こだわりを伝え合ったりする活動を通して、自ら行動を起こし、様々なものに働き掛けることの厳しさや楽しさを学び、 <u>地域の中での自分の生活や自己の生き方を考えようとする。</u>
	5年	「『夢のまちKAISEI』を自分たちの手でつくろう!」	自分たちが願う『夢のまちKAISEI』をデザインする活動を通して、地域の人とのふれあいや、思いを実現していくことの困難さと充実感を学び、 <u>よりよき開成の一員を目指そうとする。</u>
	6年	「夢のまちKAISEIをわたしたちの手でデザインしよう!」 ～わたし大好き 開成大好き～	一人一人が「夢のまちKAISEI」を実現しようとする活動を通して、 <u>自分自身や開成の町を見つめ、よさに気づき、大好きと言えるようになる。</u>
平成13年度佐賀市立開成小学校研究紀要より			

資料14の「4 評価の観点」でのチェック項目に、「評価の観点が具体化され、子どもの学びを多面的に評価するために活用することができるか(観点の共通理解が図られているか)」を挙げている。総合的な学習の時間も各教科の学習の評価と同様、観点別学習状況の評価を行う。評価の観点は、子どものよい点や進歩の状況、可能性などを積極的にとらえ、子どもの学びの事実をとらえるための一つの窓口である。総合的な学習の時間の評価の観点については、各学校が定めた目標・内容に基づいて定めるよう、各学校の判断に委ねられている。評価の観点についても、子どもの学びの事実をとらえる際に、うまく機能したかどうか、重なりやあいまいなところ、不十分なところがなかったかどうかを見直すことが必要である。

資料16 評価の観点の見直し・修正の例

